

稲盛和夫氏が京セラ製「太陽光発電パネル」を 自宅に設置しない理由に中国人が・・・

小倉健一：イトモス研究所所長

中国では「経営の神様・稲盛和夫氏は、中国の伝統的な寓話（ぐうわ）と同じようなことを言っている」といったコラムが人気を博している。稲盛哲学の中に、中国人が中国の伝統文化を感じるの普通のことのように。そんな中国人が稲盛氏を高く評価するエピソードの一つに、稲盛氏が自宅に太陽光発電パネルを設置しなかった話が挙げられる。稲盛氏が創業者である京セラが当時販売していたのに、なぜだったのか。

稲盛和夫氏が経営の神様になれたのは 「中国の伝統文化」のおかげ？

日本、そして中国において「経営の神様」と呼ばれた京セラ創業者の稲盛和夫氏が 8 月 24 日に亡くなった。

稲盛氏は日本だけでなく、特に中国の経営者からも強い尊敬の念を集めていた。とりわけ、中国の報道でも目立つのは、中国メディア光明日報(2022 年 8 月 31 日)のような表現だ。それは、稲盛氏が「フォーチュン・グローバル 500 のうちの 2 社を創業した」ことに加えて、日本航空(JAL)が会社更生法を申請した際、「日本政府から無報酬で JAL の社長兼 CEO(最高経営責任者)に任命され、同社の再建を主導した」というような紹介だ。

筆者もその見立てに賛同する。京セラ、KDDI(創業当時、第二電電)、そして JAL というまったく違う業種の会社を世界トップレベルの巨大企業に成長(JAL は再建)させた実績は、世界を見渡しても稲盛氏以外に見当たらない。

同じ業種から同じ業種への転身、もしくは近い業種を大きなビジネスに育て上げたという例ならいくらでも出てこよう。しかし、まったく分野の異なる三つの会社で大成功を収めたということは、人間離れた偉業という他ない。稲盛氏をもって「経営の神様」と呼ぶのは正しい呼称であろう。

中国人経営者に、稲盛氏の経営哲学が受け入れられたのは他にも理由がある。

中国家電メーカーの海信集団(ハイセンス)は、世界で売上高 272 億ドル(21 年通期業績)を誇る巨大企業だ。そのハイセンスの総裁である賈少謙氏は、20 年 12 月 8 日に中国・青島で開かれたイベントで次のように語った。

「中国企業はこれまで世界規模で競争力を持つ企業がなかったためか、経営者たちには自信があまりなく、欧米式経営から学ぼうとしてきた」

そして「ハイセンスは、海外企業との競争の過程において、中国式の経営にも競争力があることが分かった」と指摘。その上で、「稲盛和夫氏が経営の神様になれたのは、彼が実践した経営が西洋の経営ではなく、完全に東洋の経営、つまり中国の伝統文化と現代の経営を融合させた中国の経営を用いたからだ。これは非常に興味深い現象だ」と述べた。

日本人としては、「稲盛哲学と中国の伝統文化など関係がないだろ！」と、思わずツツ

コミを入れたくもなる。ただ、中国では「中国の伝統的な寓話にこんな話があるが、経営の神様・稲盛氏も同じようなことを言っているぞ」というようなコラムが人気を博している。稲盛哲学の中に、中国人経営者が中国の伝統文化を感じるの普通のことのようにだ。

このように中国人が稲盛哲学に心酔していることを表す例はいくつも転がっているが、中でも印象的なのは、中国人コラムニストが稲盛氏にインタビューしたときのエピソードだ。京セラが当時販売していた太陽光発電パネルを自宅に設置しているか尋ねたところ、稲盛氏は「置いていない」と答えたという。その理由にその中国人インタビュアーは度肝を抜かれたのだ。

稲盛氏の言葉を「孔子の教え」になぞらえる中国メディア

太陽光発電パネルのエピソードの前に、別の例をご紹介したい。例えば、人民日報のコラム(2021年1月4日)には、以下のようなことが載っていた。

コラムのタイトルは「小善は大悪に似たり。大善は非情に似たり」で、稲盛哲学にあるものとそのまま同じだ。コラムは、中国・秦時代の宰相だった呂不韋がまとめた書物『呂氏春秋』の「察微篇」の引用から始まる。

中国の春秋時代、魯国では多くの人が戦争で奴隷にされてしまった。他国で奴隷とされた自国民を見つけた場合、身代金を(肩代わりして)支払い、その奴隷にされていた人を魯国まで連れ戻せば、国が身代金を補填(ほてん)するという法律があった。国民が互いに助け合うことを奨励することになるので、この法律は非常によいものとされた。

孔子の弟子で、大富豪でもあった子貢は、魯国の人々が奴隷になっていたので身代金を払って取り戻したが、魯国からはお金を受け取らなかった。

それを知った孔子が「子貢よ、身代金を取り戻さないことが尊いことだと思うか。それは違う！」と激怒した。孔子の言い分はこうだ。身代金を自腹で払って取り戻したところまではよいが、国からお金を受け取らない子貢の行動が、「素晴らしいこと」と評価されてしまうと、今後、肩代わりした身代金の代金をもらおうとする人が減ってしまうだろう。そうなれば、奴隷になった人を取り返そうと考える人も減ってしまう。

子貢のやったことは、正しいことのように全く正しいことではないと孔子は考えたのだ。

逆に孔子は、子路という弟子の行いを絶賛している。子路は、溺れていた人を助けたお礼に牛をもらって、そのまま帰った。孔子によれば、何か良いことをすると良い報いが行われるのだということを世に知らしめたのだという。

以上のようなエピソードを挙げつつ、そのコラムは続けて「稲盛和夫氏も同じような話をしていて」と指摘した。稲盛氏は「小善は大悪に似たり。大善は非情に似たり」を表すエピソードとして以下のような話をしたのだという。

「ある湖のほとりに、老人が住んでいたという。ある年の寒波で、2羽の渡り鳥が餌のない湖にやってきた。老人は哀れみを感じ、毎日餌をやった。翌年、渡り鳥は多くの仲間を連れて戻ってきた。老人は餌を与え続けた。年々、渡り鳥は老人の元にやって来ては、その優しさに甘えて生きていくのである。しかし、ある年、突然、老人が死んだ。その結果、餌をねだりに来た数百羽の渡り鳥がその年に餓死してしまった」

このエピソードから稲盛氏は、こうして小さな善行が大きな悪を生むのだ、老人の小さな善行のために、何百羽もの渡り鳥がみんな死んでしまったのだ、と言ったのだという。

こうした稲盛氏と中国の故事を比較するコラムはたくさんある。稲盛氏を取り上げたこうしたコラムによって、中国人は稲盛哲学に深く心酔していったのであろう。

稲盛氏が京セラの太陽光発電パネルを 自宅に設置しなかった驚きの理由

また、光明日報のコラムニストである陳言(チェン・イェン)氏は、20年ほど前に京都にある京セラの本社で、稲盛氏をインタビューする機会があったのだという。

陳氏は先に立ち寄ったショールームをのぞいて驚いた。創業者である稲盛氏の銅像も大きな写真もなく、展示物の説明文にも稲盛氏のことはあまり書かれていなかったからだ。

さらに仰天することもあった。インタビュー中、京セラが当時販売していた太陽光発電パネルについて話が及び、「稲盛さんの自宅にはすでに設置されていますか」と聞いたところ、「置いていない」と回答があった。

陳氏がびっくりしていると、稲盛氏は続けて「自宅の屋根が小さく、目の前の建物に太陽光がさえぎられるため、太陽光発電の設置が不可能なんです」と回答したという。陳氏は「こんな裕福な人が、日の当たらない家に住んでいるなんて」とびっくりする他なかったという。

さらに今から数年前、今度は中国に来た稲盛氏に陳氏が話を聞いた。陳氏が「幸せとは何ですか」と尋ねたところ、「日曜日は夫婦で外食するのが常で、2人でスープに入った麺を1人前だけ注文し、それを二つに分けて半分ずつ食べることが多い。時にはぜいたくをして、野菜炒めを注文し、それも半分に割って食べると、幸せな気分になれるのだ」という回答があったという。

それを聞いて陳氏は「幸せはお金で測れるものではなく、仕事や生活に追われる中で、時折、ほっとするような気持ちになることなのだと感じた」と回想している。

稲盛氏が中国で評価されるのは、第一に実績、そして欧米式の経営との距離感が挙げられる。ただ、心からの敬意という点では、質素儉約をはじめとする稲盛氏のブシない人生哲学が中国人の心を打ったのだろう。(了)